

紹介

Carl W. Ernst and Bruce B. Lawrence, *Sufi Martyrs of Love: The Chishti Order in South Asia and Beyond*, New York: Palgrave Macmillan, 2002.

本書は、アメリカにおけるインドのスーフィズム、特にチシュテイー派（チシュテイーヤ）研究をリードしてきた二人の著者による共著である。二人の著者の間に分担は設定されておらず、全体の執筆・編集・校正を完全に共同作業で行うという形式で書かれている。執筆の経緯は冒頭の謝辞に記されているが、本書は著者達によって行われたチシュテイー派研究セミナーの成果などを取り入れたもので、現在のチシュテイー派研究の一つの到達点を示すものとも言える。

本文は序文と七章から構成され、それに付録・文献表・索引が付け加えられている。序文では、本書の特徴、目的や分析方針、チシュテイー派の特徴などが説明される。

本書の大きな特徴は、従来あまり用いられなかった史料、特に近・現代に書かれたものを多く使用し、これまでのスーフィズム史研究における「黄金期」とその後の衰退とよった理解ではなく「五期説」という新しい時代区分を導入した、という二点である。史料読解・分析の際には、史料中に見える過去の美化や、西欧中心主義などに見える過去の美化や、西欧中心主義などの「現代的思考」の排除が特に留意されている。また、本書はチシュテイー派を対象とした方法的（学術研究上重要な論点から分析した、という程度の意味であろうか）研究であり、今後の研究課題の把握も含む研究の総まとめ、現在まで続く精神活動としてのスーフィズム、チシュテイー派の正当な認識を目的としている。

第一章「スーフィー教団とは何か」では、これまでの「スーフィー教団（the Sufi Order）」研究史の概説とその問題点が指摘されるとともに、思想理解の枠組みや組織化の問題など、スーフィズム、チシュテイー派研究の主要な論点が簡単に整理されている。さらにこの章では、預言者ムハンマドからチシュテにシャイフが移住するまでの七一〇世紀を第一期、チシュテを根

拠地としていた一〇一二世紀を第二期、チシュテイー派が北インドに進出した一二一一四世紀を第三期、インド全土に広がり多くの地方分派が形成された一四一一八世紀を第四期、植民地支配の強化等の社会状況の変化を契機とする一八世紀から現在までを第五期とし、さらに第三期以降をインドにおけるチシュテイー派の第一―第三サイクルと呼ぶ「五期・三サイクル説」が詳述されている。

第二章「チシュテイー派の中心的修行法」は、チシュテイー派で重視されるズィクルとサマーを扱う。本章ではニザームッディーン・アウランガーバードイー（一七三〇年没）、ニザームッディーン・アウリヤー（一三二五年没）、ジャハーンギール・スィムナーニー（一四二五年没）などの著名なシャイフ達のズィクル論、サマー論の内容が紹介されており、スーフィズム研究者全般のズィクル、サマー理解を助けるものと考えられる。

第三章「系譜の技法」は、聖者伝に見える道統（スィルスィラ）、先行する時代やシャイフ等の叙述を分析し、聖者伝の著者であるスーフィー達が過去をどのように理

解し、自分達の活動や時代にどのような意義付けを行ったのか、という問題に迫っている。この章では、先に紹介した「五期説」の中の第4期、すなわち第二サイクルにおける、チシュテイー派の分派・道統形成と連動した議論が行われている。

第四章「チシュテイー派の導師達」では、ニザームッディーン・アウリヤー、アシユラフ・ジャハーンギール・スィムナーニー、ザウキー・シャー（一九五一年没）という、チシュテイー派の各サイクルにおける特徴的なシャイフの生涯やその思想・活動が紹介されている。その紹介は同時に、各サイクルの特徴を分析する際の着目点や、チシュテイー派の時代による変遷と連続性の叙述にもなっている。

第五章「チシュテイー派の主要霊廟」では、墓参詣の是非や意義に関する議論、墓参詣に行われる儀礼、霊廟と支配層の結びつきなど、近年日本においても注目を集めている墓参詣や霊廟の社会的機能・役割に関する問題点が、ムガル朝皇女ジャハーンアラーのアジメール参詣、皇帝アクバルのファテプル・スィークリー建設といった個別の歴史的事例を用いて分析され

ている。

第六章「植民統治下のチシュテイー派」は、第五期、第三サイクルの初期に当たる植民統治時代の包括的な把握を試みた章である。チシュテイー派関係者自身がこの時代を語る際と同様、ニザーム派とサービリー派という二つの主要分派が中心におかれ、ニザーム派の節ではスライマーン・タウンサウイー（一八五〇年没）、ハサン・ニザーム（一九五五年没）、サービリー派の節では同派の起源とアシユラフ・アリー・タウンサウイー（一九四三年没）等の思想や活動が紹介されている。

第七章「現代のチシュテイー派」では、現代におけるチシュテイー派のシャイフ達の活動や、現代社会の変化や科学技術の発達に伴うスーフイズム、チシュテイー派の変化と、第二サイクルまでの要素との連続性などが、インドのみならず欧米における動向なども踏まえて叙述される。

以上の本文に、主要な聖者の命日を記したウルス・カレンダーと、一七世紀に書かれた聖者伝 *Arsh al-Akbar* の記述の翻訳を中心とした、インドのチシュテイー派最初の五名のシャイフと各地方の主要なシ

ヤイフの簡単な紹介が付録として加えられている。文献表は、西欧語の研究とウルドゥー語・ペルシア語の史料とに大別されており、西欧語の研究は概説、シャイフ個人の伝記、施設・組織研究など、研究対象やテーマによって、ウルドゥー語・ペルシア語の史料は聖者伝、「懐古的」マルフザート（語録）、「源」マルフザートなどに種別によって細目に分類されている。これらの分類は本書の論点整理や、著者の一人であるエルンストが展開してきた史料論などに基づく独自のものであり、扱いは多少の注意を要する*。

本書は全体として、修行法・組織化・文献学など、スーフイズム研究における主要な論点テーマ毎に各章に配置され、章の冒頭でそれらの論点が整理された後、チシュテイー派の個別の事例が挙げられるという巧みな構成になっている。また、それらの具体例は本書の冒頭において提唱される「五期・三サイクル説」の中に位置付けられ、時系列の理解を大きく助けている。専門用語や原語の使用を最低限に留めている点も合わせ、専門外の人間や初学者からスーフイズム、チシュテイー派研究の専門

家まで、幅広い層の読者にとつて有益な書である。

*本書ではマルフリーザートの分類に関しては詳説されておらず、Ernst, C. W., *Eternal Garden: Mysticism, History, and Politics at a South Asian Sufi Center*, State University of New York Press, 1992: 62-84等を参照する必要がある。

(二)宮玄子 京都大学大学院文学研究科博士後期課程

浅野和生著

『イスタンブールの大聖堂』

—モザイク画が語るビザンティン帝国—

わが国におけるビザンツ美術研究の第一世代を辻佐保子氏や辻茂史氏とするなら、本書の著者である浅野氏は第二世代のビザンツ美術史家ということになる。ビザンツ、ビザンティンという語の相違に顕著に表れているように、わが国におけるビザンツ研究は歴史研究と美術史研究の二つの異なる伝統のもとに育まれてきた。一般に、問題意識や方法論の点で、歴史学と美術史

には大きな溝があると想像されがちであるが、欧米のビザンツ研究を見た場合、両者の距離はそれほど隔たつてはいない。前世紀においても、イギリスのビザンツ史家シリル・マンゴーを筆頭に、名だたるビザンティニストらはジャンルの垣根を越え、優れた研究成果を生み出しているのである。

そういって近年の学際的なビザンツ学の成果が存分に活用された本書は、新書という体裁をとつてはいるが、狭い意味での美術史の啓蒙書にとどまるものではない。浅野氏は、五世紀に創建されたビザンツの象徴ともいふべき巨大建築物「聖ソフィア大聖堂」と、そこに描かれた数々のモザイク画を主役に据え、その歴史、美術・建築史的問題を平易な文章と豊富な図版で解き明かしていく。

本書の顕著な特徴は、美術や建築を徹底して歴史的コンテクストの中で理解しようとする姿勢である。絵画や建築技法とその変遷に関する叙述は、美術史家の手によるものとしては驚くほど少なく、それに代わって同時代の政治・社会情勢の説明に紙幅が多く割かれている。

イスタンブールに残るビザンツ美術の観

光案内でもいふべきプロローグに続いて、第一章では、ユスティニアヌス帝治世初期に生じ、大聖堂を火災に巻き込んだ「ニカの乱」の模様がプロコロピオスの引用とともに鮮やかに語られている。ユスティニアヌスによる聖堂再建事業に焦点を当てた第二章では、聖堂の建築史的獨創性が、イサウリア人建築家たちが帝国各地で活躍した六世紀の状況と関連付けて説明される。

二世紀に及んだ聖像論争が聖堂に及ぼした影響に触れた第三章を経て、本書の枢要ともいふべき第四章では、論争の終結後に作成されたモザイク画の作者、作成年代、作成意図が丹念に検討される。モザイク画の多くは皇帝や皇后の姿を描いているため、筆者は妥当な解答を求め、同時代の帝国政治史の森に果敢に踏み込んでいく。ビザンツ末期と帝国滅亡後の聖堂の運命を扱った第五、六章では、わが国ではあまり知られていないロシア人巡礼者やトルコ人歴史家の記述が紹介され、聖堂の内部景観や、聖堂を巡る政治状況が多面的に再構成されており、非常に興味深い。

一般に、歴史研究者は、何かしらの構造や事件、人物といったものから歴史を読み